

～新渡戸記念の～

『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第41回『「医師の3か条」 ～ 「時代の波は 寄せては返す」 ～』

『第40回「言葉の院外処方箋」心の処方箋 ～ 悩みがスッキリ軽くなる ～』を拝読された患者さんから『「青虫が 蝶になる」よう、日々いろいろな事から学んでいきたいと思います。』とのユーモア溢れるメールを頂いた。昨日（2021年1月23日）は、『第182回「楕円形の心」：「賢明なリーダー と イニシアチブ」」～「Union is Power」～』&『第130回「21世紀のエステル会」：互いに いたわり合う ～ もしかすると、この時のため ～』を拝読された著名な医学者から「賢慮と愛情に溢れる先生のご活躍には いつも頭が下がります。 がん哲学外来、新渡戸稲造の顕彰など、後輩たちが 先生の教えに触れて 成長する姿が目に見えます。」との励ましのメールを頂いた。今朝は『第128回「心に咲く花会」：高き自由の精神 ～ 愛ある者は 勇敢なる者である ～』を拝読された臨床医からは、「一流。他人に感動を与えることができる人。単に能力に秀でていただけではなく、その生き方が人々の見本となる人。まさに先生のことですね。」と、心温まるメールを頂いた。

また、コロナ時代、10年前の筆者の文章の「医師の3か条」（添付）が、話題になった。まさに、「時代の波は 寄せては返す」の実感の時である。

『医師の3か条』

- 1) 医師は生涯書生
- 2) 医師は社会の優越者ではない
- 3) 医業には自己犠牲が伴う

モットーは、「個性と多様性 ～ 冗談を実現する胆力 ～」ではなかろうか

編集後記

2月10日は、吉田富三（1903－1973）の誕生日であった。思えば、2003年「吉田富三生誕100周年」を全国で展開したのが記憶に新しい。その貴重な経験が、『がん哲学』（2004年）へと導かれた。吉田富三の当時の命題は、「今日の命題でもあり、将来の命題でもある」。筆者は、第99回日本病理学会総会（2010年）を会長として主宰する機会が与えられた。テーマは「広々とした病理学～深くて簡明、重くて軽妙、情熱的で冷静～」であった。恩師である菅野晴夫先生（癌研顧問）による『病理の百年を振り返って』の特別講演がなされた。「現在を的確に認識し未来を志向する」にあたって、如何に「歴史的な財産」の学びが必要不可欠であるのかを、実感する時であった。「病理学」を極めることは、「森を見て木の皮まで見る」ことであり、マクロからミクロまでの手順を踏んだ「丁寧な大局観」を獲得する「厳粛な訓練」の場でもある。「医師は生涯書生」・「医師は社会の優越者ではない」・「医業には自己犠牲が伴う」（吉田富三）は、まさに「医師の3ヶ条」であろう。

編集長・広報委員長 樋野 興夫